身体知覚とボディ・イメージの関係

藤田雅子

A study of the relationship between body image and the perception of body

by
Masako Fujita

I. 問題の背景

ボディ・イメージbody-imageとは各個人が自分自身の身体についてもっている主観的な像であって，身体像と日本語に訳されている。Bender, L. とSilver, A. (1948) によると，「我々のもつゲシュタルトgestaltは成長と発達という一定の生物学的法則によって決定された母体としてひとつのパターンをつくりあげ，それは徐々に明確化してくる。もとをただせば胎児期の発達に規定されているのであって，それに身体感覚や情緒的刺激による新しい経験が加わり，ボディ・イメージを修正していく。この新しい経験は，皮膚，内臓，運動，諸感覚を通して，子どもとしての身体から大人としての身体への探究という形で生じてくるのである。それに社会的要素，すなわち，他人の行動や態度の影響が加えられていく。これらの新しい経験はバラバラに生じるのではなく，神経機構の中に統合され，更に新しい経験を修正し，方向づけ，そして情緒的意味を提供していくことになる。この作用は意識的に行なわれることも，無意識的な場合もある。ボディ・イメージは知覚や経験の総和ではないが，これらの集まりが我々のもつゲシュタルトとなっていくのである。」とボディ・イメージを定義づけている。身体が生物学的対象にとどまることなく，そこに人格的要素を含んでいるからこそ関心が増大するのであるが，ボディとパースナリティとの関係について多くの研究者がとり組んできており，その主たる流れは次の5つに大別される。

(1) 身体と体型を同じに考える立場で，Sheldon, W. H. & Stevens, S. S. (1942) やKretshmer, H. (1923) らは身体的構造の次元と人格諸特性との関係を証明しようとした。

(2) 身体を血圧やGSRなどの生理学的機能の尺度と等しく考える立場で，生理学的尺度と人格変数との相関を証明しようとした。

(3) 身体的概念を身体障害に関するパースナリティ論に導入する立場がある。その代表的なものが，Adler, A (1930) の器官劣等感の理論である。例えば，手足の切断などのために，ある身体部分を失うということは，その個人は自分自身に対してマイナスであると感じ，補償的に高い成就の方向への動機づけについて説明しているが，これは防衛反応に関係しているというものである。

(4) 身体は精神身体学の領域では特別の意味をもっている。人格的な力が，身体的生理学的過程をゆがめることによってどのようにして身体的な病気を生じさせるかを示そうとする立場であって，精神身体医学では身体についての心理学的現象への関心が強まっている。

(5) ボディ・イメージを公式で書きあらわそうとする立場で，ボディ・イメージを心理的経験として身体を言及し，自分自身の身体に対する感情や態度に焦点を合わせている用語であると把握をしている。個人は発達するにつれて自分の身体からの感覚を有意味に組織化するという課題をもってくるのであって，その人の全知覚領域の中で特に重要かつ複雑な現象であるという仮説をたて，これを公式化，立証しようとしている。

以上の流れがあるが，個人的な関心としては，(3)と(5)，すなわち身体障害とボディ・イメージの関連，そしてボディ・イメージを科学的，客観的に把握するための方法の確立とである。身体障害児・者は当然のことながら，障害のない人達と共通の要求，そして障害からくる固有の要求といった二重の要求の持ち主であるから，研究の方向として(5)→(3)，更に，ボディ・イメージの再編成の問題，そしてリハビリテーションへの導入という方向が

とれるのではないかと考える。

Ⅱ. 研 究 目 的

各個人が自分自身の身体についてもっている主観的な像であるボディ・イメージを測定することを目的としている。そのために心理的経験として測定しうる身体尺度を設定することが第一の段階で，次に，その身体尺度で測定された結果を比較検討し，各身体尺度を関連づけ，更に，性格・行動にどのように反映されるかを見ることにより，ボディ・イメージを明確化しようとするものである。

これは肢体不自由者とボディ・イメージの関係を探究するための予備研究としての意味をもたせたい。

Table 1　The Homonym Test of Bodily Concern

※ Neutral word

No.	Stimulus Word	Body Ward	Non－Body	No.	Stimulus Word	Body Ward	Non－Body
1 ※	いと	――	――	36 ※	ふきょう	――	――
2	いちょう	胃腸	銀杏	37	ぜんかい	全快	全壊
3	おうだん	黄疸	横断	38	せんけつ	鮮血	先決
4	かぜ	風邪	風	39	ぜんしん	全身	前進・前進
5	かのう	化膿	可能	40	ぞうき	臓器	雑木
6 ※	はし	――	――	41 ※	たび	――	――
7	かみ	髪	紙・神	42	たいじ	胎児	退治
8	かんかく	感覚	間隔	43	だいちょう	大腸	台帳
9	かんせん	汗腺・感染	観戦	44	だいべん	大便	代弁
10	きかん	器管・器官	期間・機関	45	たん	痰	淡
11 ※	さけ	――	――	46 ※	しろ	――	――
12	きょうい	胸囲	脅威	47	たんのう	胆のう	堪能
13	きんし	近視	禁止・金糸	48	ちち	乳	父
14	けっこう	血行	欠航・決行	49	つうふう	痛風	通風
15	けっせい	血清	結成	50	つば	唾液（つばき）	鍔(刀剣)・帽子のつば
16 ※	せんたく	――	――	51 ※	かてい	――	――
17	こうがん	睾丸	紅顔・厚顔	52	てんかん	癲癇	転換
18	こうもん	肛門	校門	53	でんせん	伝染	電線
19	ごかん	五感・五官	語感	54	どう	胴	銅
20	こぶ	瘤	昆布	55	どうき	動悸	動機
21 ※	りょうしん	――	――	56 ※	がっきゅう	――	――
22	さいけつ	採血	採決・裁決	57	にゅうし	乳歯	入試
23	さんご	産後	珊瑚	58	にゅうせん	乳腺	入選
24	さんぷ	産婦	撒布	59	はい	肺	灰・（蠅）
25	しか	歯科	鹿・市価	60	はく	吐く	掃く・履く
26 ※	もうじゅう	――	――	61 ※	かひ	――	――
27	しかく	視覚	四角・死角・資格	62	はな	鼻	花
28	しきゅう	子宮	支給・至急・死球・四球	63	はら	腹	原
29	しゅっけつ	出血	出欠	64	ひにん	避妊	否認
30	しゅよう	腫瘍	主要	65	ぶんぴつ	分泌	文筆
31 ※	ほしゅ	――	――	66 ※	いじ	――	――
32	しょくどう	食道	食堂	67	また	股	又
33	しんちょう	身長	慎重・新調・深長	68	まゆ	眉	繭
34	せいし	精子	制止・製糸・静止	69	もも	大腿	桃
35	せいしょく	生殖	聖職	70	ようし	容姿	要旨・用紙

Ⅲ. 研 究 方 法

1. 身体尺度の設定と測定方法

ボディ・イメージを測定するための4つの身体尺度（①，②，③，④）と，性格・行動特性をとらえるための2つの尺度（⑤，⑥）を設定した。

① 身体境界 body boundary 反応1
　　障壁反応 barrier

② 身体境界反応2　貫通反応 penetration

③ 身体的関心 bodily concern

④ 身体的カセクシス body cathexis

⑤ 劣等感 inferiority feeling

⑥ 活動性 general activity

測定方法としては，①と②のためにロールシャッハ・テスト Rorschach Test，③のために同意異義語テスト Homonym Test，④のために身体カセクシステスト Body Cathexis Test，⑤と⑥のためにY－G（矢田部ギルフォード性格検査，竹井機器）のうち項目ＩとＧの粗

点，を各々用いた。

2．測定方法についての説明

身体境界としてbarrier反応とpenetration反応は，Fisher, S & Cleveland, S. E. (1958) が身体像をとらえる際にbody boundaryという概念を用いて考えており，その境界の把握の仕方にふたとおり，すなわち，境界を外界を隔てている障壁としてとらえる場合（barrier反応）と，その境界は保護的な価値はなく容易に貫通されてしまうということでとらえる場合（penetration反応）とがあるとしている。このbarrier反応とpenetration反応を見るのにロールシャッハ・テストを用いており，施行方法，教示など普通のやり方と同様で，カードもⅠ～Ⅹまで10枚について見ている。ただし，結果の解釈の仕方は全く異なり，独自の分析表により得点化している。なお，このFisher & Clevelandの研究は，彼ら自身および多くのDoctoral dissertation（Landau：Colombia University, Massen, Sieracki：State University of New York at Buffalo など）で追試がくりかえされている。得点化のための分析一覧は次頁のTable 3に示すとおりである。今回もこの分析表に沿ってbarrier反応，penetration反応共に得点化し，通常のW全体反応，D普通大部分反応，d普通小部分反応，s間隙反応などの反応領域とは無関係に，分析表に該当する数の総計を各々の得点とした。

次にボディ・イメージのうち身体的関心を測定するために，「身体的関心について同音異義語検査」を用いた。The Secord Homonym Test of Bodily Concern (1950) があり，同じ音であるが意味の異る言葉で，しかも一方に身体的意味をもつ〔例：index (stimulus word) → finger (body-word), book (non-body)〕一種の連想検査を考案している。これは国語の違いのため使用不可能であるので日本人に使用できる検査を作成した。国語辞典の中から身体的用語と非身体的用語の両方に使用している多く同音異義語を選出し，さらにそのうちよく使用されると考えられる131項目について予備調査をし，20%以上の者が身体的意味に使用している56の言葉に，14の中性語を加えて同音異義語テストを作成した（予備調査の結果は省略）。項目一覧はTable 1のとおりである。

身体的カセクシスを測定するために，The Secord-Jourard Body Cathexis Testの日本語訳を用いた（訳は，大学の一般教養英語担当教員2名と私とで一致したものを使用した）。これはTable 2に示すように，身体部位あるいは身体機能についての45項目に対して，全然好きでなく違ってくれたらよかった「1」から，とても満足していて幸運だと思う「5」というものまでの5段階に自己評価するテストである。

3．結果の処理の仕方

barrier得点とpenetration得点は，各々の反応数の総計，身体的関心の得点は〔身体的用語項目数／(56－空白項目数)〕×100で算出し，身体カセクシス45項目の平均，ＩとＧは粗点であらわした。そして，更に各尺度間の相関を算出した。

4．被験者および調査期間

4年制大学の2年生31名（男子8名，女子23名）が被験者である。調査時期は，ＴＡＴ，ＤＡＰ，ＳＣＴなどを含めて，昭和52年5月から昭和53年1月（夏休みと冬休みを除く）までである。

Table 2　Body Cathexis Test

次の45項目について「1」(全然好きでなく，違っていてくれたらよかったと思う）から「5」(とても満足していて幸運だと思う）までの5段階に評価する。

1．髪	2．顔色	3．食欲	4．手
5．毛ぶかさ	6．鼻	7．指	8．排泄
9．手首	10．呼吸	11．ウエスト	12．活気
13．背中	14．耳	15．あご	16．運動
17．足首	18．首	19．頭のかたち	20．体格
21．横顔	22．身長	23．年令	24．肩巾
25．腕	26．胸	27．目	28．消化
29．腰(尻)	30．はだざわり	31．くちびる	32．脚
33．歯	34．ひたい	35．足	36．睡眠
37．声	38．健康	39．性器	40．ひざ
41．姿勢	42．顔	43．体重	44．男らしさ(女らしさ)
45．胴			

Ⅳ．結　　果

1．身体尺度別の結果

Table 4を参照しながら結果の概要について述べる。

Barrier得点は3点から29点まで分布し，その平均は，13.58である。1ＳＤより大きい者は6名で，身体的境界は外界を隔てている障壁としてとらえており，1ＳＤより小さい者は4名で，境界は外界とを隔てる障壁としてみることは少ない。

Penetration得点は0～11点までに分布し，その平均は2.74となっている。1ＳＤより大きい者は5名で，身体的境界は保護的価値はなく容易に貫通されてしまうという表現をしているが1ＳＤ以下の4名には全くこのような表現はみあたらない。

同音異義語テストによる身体的関心についてみると，理論上では0～100に分布するわけであるが，実際は

Table 3 Fisher and Cleveland Body Boundary Scoring

I. Barrier Response 障壁反応

1 衣類

(1) あらゆる衣料品はBarrier得点となる。

Barrierとして得点になるもののうちで誰かが身につけている衣類の例を挙げると次のようになる。

- ハイネックの洋服の女性
- おかしな衣裳の人
- 長いナイトドレスの女性
- 冠をかぶった男性
- レースのえりのコートの男性
- robeの男性
- 房のある帽子をかぶった鬼の子
- 手袋をした人
- ずきんの人
- おもしろい赤いソックスをはいた足
- にわとりの羽根をつけた男性
- 帽子をかさねてかぶっている男性
- つめえりの男性

(2) 次に衣料品の中にもBarrier得点とならないものがあるので注意を要する。

カードⅣの長ぐつ，カードⅢのちょうネクタイという反応はよく出てくるので得点とはならない。衣類でも得点されないものとしては次のような例がある。

- 洋服をきた女性
- 帽子をかぶった男性
- コートを着た男性

2 動物

(1) 膚に特色があったりあるいは珍らしい動物や生物は頭があるときのみ得点となる。この諸反応のカテゴリーが，珍らしい，価値がある，特に目立つあるいは特別に保護的な膚の動物に関係しているということは，表面をおおっているという表現であるという仮定に基づいている。次にそのような動物のリストがある。

- アメリカわに
- きつね
- おおやまねこ
- マーモット
- スカンク
- あなぐま
- やぎ
- ミンク
- さい
- とら
- ビーバー
- かば
- もぐら
- さそり
- せいうち
- 山ねこ
- ハイエナ
- 野性やぎ
- とど
- いたち
- カメレオン
- ひょう
- くじゃく
- あざらし
- 野性のねこ
- コヨーテ
- ライオン
- ペンギン
- 羊又は小羊
- くずり
- アフリカわに
- とかげ
- やまあらし
- シャムねこ
- しま馬

(2) 他のどんな動物であっても，その膚が，表面の感触や，けばだったとか，ぶちがあるとか，しまがあるとかなどの特徴が強調されているときは得点となった。カードⅣの熊の膚は除外された。

- けばでおおわれた膚
- まだらな膚
- しまのある膚

(3) 貝がらをもつ生物はcovering categoryに含められる。ただし，かにとえびはよく出てくるので除外されたが，その貝がらのみが出てくる場合は得点になった。次に貝がらをもつ生物の例を挙げる。

- かたつむり
- 小えび
- むらさき貝（二枚貝）
- はまぐり

3 囲こまれている空地。 • 谷 • 峡谷 • 鉱山のたて抗 • 井戸 • 運河

4 動物のもっている入物。 • 胃にガスのたまったねこ • 妊娠した女性 • カンガルー • 乳房(山羊)

5 保護している表面。 • 傘 • 日除け（窓などの外につけた） • ドーム • 盾

6 保護のため自分自身のもっている壁に依存している物で，よろいのようなものでおおわれている。

- タンク
- 戦艦
- 宇宙のロケット船
- 装甲車
- よろいを着た人

7 おおわれていたり，周囲がかこまれていたり，包み隠されている物。

- 草におおいかくされたボール
- 毛布をかぶされた人
- 煙にまかれた家
- 何かにかくされている人
- こけでおおわれた丸太
- 石の後からそっとのぞいている人
- 木の後にいる人
- 背中いっぱい荷物をしょったろば
- ふたつの石の間にはさまった人

8 珍らしい容器状の形や特徴のある物。 • 風笛 • フェリス観覧車 • 玉座 • 椅子

9 覆面（マスク，仮面）は得点にならない。以前は建物やcontaing attributesをもつ乗物（自動車，飛行機，ロケット）は得点にならなかったが，得点法が変わってBarrierに数えられるようになった。

- テント
- とりで
- エスキモーの家
- かまぼこ形兵舎
- アーチ

10 物をつかんだり，もったりする道具は得点にならない。 • やっとこ • ピンセット • ～ばさみ

Barrier反応の追加例

• あみ　• ベル　• ベールをつけた踊子　• つぼ　• 本　• ケーキの上の砂糖　• 川
• 本たて　• スクリーン　• びん　• 手袋　• さじ（スプーン）
• 港　• かめ（骨つぼ）　• おり（鳥かご）　• 髪かざり　• 壁
• ろうそくたて　• ほら穴　• 歩道に沿ったいけがき　• 壁紙　• （かいこなどの）まゆ
• ヘルメット　• かつら　• 入江　• 土地にかこまれた湖　• 水にかこまれた土地

Ⅱ. Penetration Response　貫通反応

人間の外面は保護的価値をあまりにもたないで，容易に貫通されてしまうのだという感情表現

特性A：物の外面の貫通，崩壊，摩滅といったイメージ。
• 肉をつらぬいた弾丸　• こじあけられた亀のこうら　• つぶされたかぶと虫　• すりへった動物の皮
特性B：物の内側に入りこむ，あるいは内側から外側へ通り抜けるための方法や経路を強調するイメージ。
• 腔　• 肛門　• 開いた口　• 入口　• 戸口
特性C：容易に透過したり，こわれたりしやすい物の表面を含むイメージ。
• 綿あめの柔らかいボール　• ふわふわした綿毛のような雲　• ぬかるみ

Penetration of Boundary反応のサブ・カテゴリー

1　あいていたり，何かを取り入れたり，出したりするために用いられる口に関係するもの。
• 食べている犬　• 吐いている人　• あくびをしている犬　• つばをはいている男の子
• 舌をつき出している人　• 口をあけている人　• 水を飲んでいる動物
ただし，歌をうたったり，話をするために口を使う場合は得点にならない。

2　逃れたり，迂回したり，貫通して，外部から内部に到達するもの。
• レントゲン写真　• (X線)蛍光透視鏡を通してみた身体　• 器官の横断図　• 切開した身体
• 身体の内部　• 死体解剖

3　破れたり，折れたり，傷ついたり，だめになってしまった身体壁に関するもの。
• つぶされた（かぶと）虫　• けが　• 傷ついた男の人　• 刺された男の人　• 血を流している人
• はがされた人間の皮膚

4　境界のないような地球上に開口している部分や，そこからいろいろな物が押し出される場合。
• 底なしの深海　• 地中から吹き出す間欠泉　• わき出る泉　• 噴油井

5　どんな開口部も得点となる。
• 肛門　• 産道　• 戸口　• 入口　• のぞきこむ　• 鼻孔　• 直腸　• 腔　• 窓

6　実在しない，あるいは，さわってみられるような境界の外にあるもの。
• わたがし　• かげ　• おばけ　• やわらかいぬかるみ

7　透明なもの。　• 洋服をとおしてみえる　• 透明な窓

8　Penetration反応の追加例
• 木の上で物をかんでいる動物　• 穴のあいたバット　• バラバラにされたちょうちょ
• 引き裂かれた毛皮のコート　• まとまらないジグソウパズル　• バラバラになった羽根
• 戸口　• 衰えた羽根　• 肉のなくなった魚　• 何かを食べる（つつく）昆虫
• こわれた身体　• 港の入口　• 便をしている男の人

Ⅲ. Barrier と Penetrationの両方に共通の反応

• こわれたよろいを着た人　• 爆撃された戦艦　• こわれた花びん

Table 4　身体尺度に関する各検査の得点

尺度 / 人(性)	Barrier	Penet-ration	Concern	Cothexis	I	G
1 F	10	2	64.29⊕	2.51⊖	5	6
2 F	20⊕	2	66.07⊕	2.29⊖	18⊕	13
3 F	26⊕	3	33.93⊖	2.89	3⊖	17⊕
4 F	20⊕	1	57.14	2.53⊖	11	14
5 F	18	2	62.50⊕	2.62	18⊕	4⊖
6 F	18	3	62.50⊕	2.84	15	7
7 F	14	3	50.00	2.89	16⊕	12
8 F	8	2	64.81⊕	3.13⊕	4⊖	12
9 F	3⊖	4	39.29	2.98	7	10
10 F	11	2	56.36	3.00	12	12
11 F	15	0⊖	61.82⊕	2.84	12	6
12 M	19	4	27.27⊖	2.67	4⊖	5⊖
13 F	8	0⊖	35.19⊖	2.80	13	5⊖
14 F	15	2	65.45⊕	2.33⊖	9	6
15 M	8	3	51.79	3.40⊕	10	9
16 F	13	1	46.43	2.51⊖	17⊕	11
17 F	7⊖	1	50.00	2.96	2⊖	10
18 F	4⊖	0⊖	40.74	2.89	6	4⊖
19 M	29⊕	5⊕	29.63⊖	2.53⊖	10	5⊖
20 F	7⊖	2	47.27	3.47⊕	4⊖	19⊕
21 M	10	6⊕	55.56	2.80	4⊖	14
22 M	10	5⊕	50.91	2.84	18⊕	10
23 F	15	2	55.36	2.51⊖	8	10
24 M	23⊕	3	40.00	2.91	8	14
25 M	16	3	40.00	3.38⊕	8	15⊕
26 F	13	5⊕	50.91	2.96	9	12
27 M	8	4	42.86	3.00	16⊕	2⊖
28 F	21⊕	1	50.91	2.49⊖	20⊕	8
29 F	11	0⊖	41.82	2.76	16⊕	9
30 F	8	11⊕	40.00	3.07	6	15⊕
31 F	13	3	45.45	3.07	2⊖	18⊕
平　均	13.58	2.74	49.23	2.83	10.03	10.13
SD	6.32	2.21	10.92	0.29	5.46	4.44
R	3	0	27.3	2.29	2	2
	|	|	|	|	|	|
	29	11	65.5	3.47	20	19

注　⊕は1SD以上、⊖は1SD以下を示す。

27.3～65.5に分布し，その平均は49.23であって，同音異義語に対する反応は，body wordとして反応した言葉と，no bodyと反応した言葉とが半々で(body word 49.23%)，両者に統計的有意差はみられなかった。1SDより大きく，身体的関心を強く表現した者は7名で，1SDより小さくて身体的関心をあまり表現しなかったか，防衛反応として表面的には小さかったであろう者も含めて4名である。

身体カセクシステストによる自己の身体および身体機能への満足度についてみると，理論的には1～5に分布するわけであるが（数値が大きいほど満足している），実際は2.29～3.47に分布し，その平均は2.83であった。1SDより大きくて満足している者は4名で，反対に満足しない傾向にある者は7名となっている。また，表にはのせられなかったが，どの身体部分あるいは機能に満足しているか，逆に満足していないかを見てみる。平均2.84，SD＝0.41であったので，1SD以上，すなわち被験者全体としてみて満足している部位あるいは機能は，満足度の高い順に，食欲，健康，活気，呼吸，手首，睡眠となっており，逆に1SD以下，すなわち全体として不満足な部位あるいは機能をみると，最も不満足なのは，脚，続いて，体格，体重，歯，ウエスト，身長，鼻となっている。

次にY－G性格検査の中でI（劣等感）とG（一般的活動性）をとりあげ，その粗点についてみてみる。Iは自信の欠乏，自己の過小評価，不適応感などをあらわしており，得点が高い方が劣等感が強いということになる。平均10.03で2～20に分布している。1SD以上で劣等感の強い者は8名で，そのほとんどが標準点5，または5に近い4の範囲に入る。一方，1SD以下で劣等感の弱い者は7名で，標準点では1，または1に近い2の範囲に入る。Gは活発な性質，身体を動かすことが好きといったような特性を示しており，得点が高いほど活動的な傾向になるが，平均が10.13で，2～19に分布している。1SD以上で活動的な者は5名で，標準点では4または5の範囲である。逆に1SD以下で非活動的な者は6名で，標準点では1または1に近い2の範囲にある。

2．身体尺度間の相関

Table 5を参照して，各身体尺度間の相関についてみてみる。

まず，身体的境界に関するふたつのとらえ方，すなわち，barrierとしての境界と，penetrationとしての境界との間の相関はr＝－.01で全く相関はなかった。また，barrierあるいはpenetrationのいずれかの境界の把握と他の身体的尺度との関係をみると，penetrationの方は明確な傾向はでていない。barrierの方は特徴的なこととして，body cathexisとの間にr＝－.46（p＝.01）で有意な逆相関があり，barrierが高いとbody cothexisは低いか，あるいはbarrierが低いとbody cathexisが高いということになる。

次に身体的関心であるが他の尺度との関係については特に有意な結果は得られていない。

Body cathexisについては，前述のとおりbarrierとの間に負の有意な相関がある他，Iとの間にr＝－.39（p＝.05）と有意な相関があり，body cathexisが高い者ほど劣等感は弱く，逆にbody cathexisが低い者ほど劣等感は強いという関係がある。またGとの間にr＝.40（p＝.05）という正の相関があり，body cathexisの高い者ほど活動的で，body cathexisの低い者ほど非活動的であるという結果になっている。

最後にIとGとの関係であるが，両者間にはr＝－.38（p＝.05）という有意な負の相関があり，劣等感の強い者は非活動的で，劣等感の弱い者は活動的であるという

Table 5 Correlation Coefficients of Body Measures

	Barrier	Penetration	Bodily Concern	Body Cathexis	Inferiority	General Activity
Barrier		−.01	−.10	−.46※※	.20	.05
Penetration			−.24	.22	−.22	.25
Bodily Concern				−.26	.24	−.03
Body Cathexis					−.39※	.40※
Inferiority						−.38※
General Activity						

※ 5%　※※ 1%

結果になっている。

V. 考　　察

1. 身体的境界としてのボディ・イメージ

Fisher & Cleveland (1958) 以来，ボディ・イメージを身体的境界としてとらえ，この境界をbarrierとしての境界とpenetrationとしてイメージを区分してきているが，本研究でも，両者間には全く相関はなく（r＝−.01)，身体的境界に関してもつイメージには，外界を隔てている障壁としてのイメージと，その境界が保護的価値をもたずに容易に貫通してしまうというイメージとは，互に，相容れないものであることが証明された。さらに，body cathexisの間には有意な負の相関があって，barrierが高く障壁としてのイメージの強い者は自己の身体部位あるいは機能に対して不満足を示すということは注目に値すると考える。つまり，自分の身体に対して評価の低い者は，身体的境界であるボディ・イメージをしっかりした保護的な境界としてとらえようとしているということになるからである。(代表的なケースは，No.2，19，28など，逆のケースはNo.20など)。 一方，penetrationの方は，barrierとは全く違うbody image boundaryであることは立証されたものの，全体の平均が2.74と低く反応数そのものが少く，明確な他のbody-imageの尺度との関連も薄いので，それらとのかかわりはわからない。ただ，No.31は他と比較し，非常に高い反応数を示しているので，このような場合のケース研究の必要があると考えられる。

2. 自己の身体に対する評価としてのボディ・イメージ

CathexisはIと負の有意な相関があり（r＝−.39)，自己の身体の評価が高い者は劣等感が小さく（No.8，20など)，逆に自己の身体の評価が低い者は劣等感が大きい（No.2，16，28など）という結果になり，body cathexisとしてのボディ・イメージは劣等感の有無と密接な関係にあると考えられる。さらにcathexisはGと正の有意な相関があり（r＝.40)，自己の身体に対する評価の高い者は活動的であり（No.20など)，逆に自己の身体に対する評価の低い者は非活動的である（No.19など）ということになり，自己の身体に対する評価の高低は，その人が活動的であるかどうかということにも関連があることは確かである。

3. 劣等感と活動性との関連

劣等感と活動性は性格・行動特性であって，ボディ・イメージとしての身体尺度ではないが，両者とも自己の身体に対する評価と関連のあることは証明されており，必然的にIとGとの間には有意な負の相関が存在することになる（r＝−.38)。 つまり，劣等感が強い者は活動性は低くなり（No.5，27など)，逆に劣等感の弱い者は活動的である（No.20，31など）という傾向をもっているようである。しかも劣等感および活動性は自己の身体に対する評価の良否とかかわりのあることを考えあわせるなら，どれが原因でどれが結果であるというようなことはわからないが，劣等感は，安全感を失わせて自信を喪失させるなどマイナスの徴候を生じさせることが多く，逃避的になるとか，不安を感ずるとか，緊張が高まって爆発的に発散させるような反応を起こす反面，積極的に劣等感を補おうとすることもあるわけで，この結果のように身体的評価が低い——本研究の対象者の場合，身体障害という客観的存在はないという点で，Adler，A.のいう器官劣等感organ inferiorityとは異るが，自己の身体に対して評価が低いということは主観的には身体障害にかわる何かが存在しているという点で共通点がある——場合，これを補償compensationする方向にもっていかなくてはならない。精神的補償と相俟った身体的補償を達成し，劣等感のもつエネルギーを社会生活に適応させるように変化させることが大切である。

4. 身体的関心

同音意義語テストによる得点で全体の3分の2の者は38.31〜60.15の範囲（平均より−1SD，＋1SD）に位置しており，これ以下，あるいはこれ以上の者には何か特徴があると考えられるが特に特徴はないし，統計上

も見い出せなかった。ただ，関心の大（Table 4の⊕の記号）あるいは小（⊖）とcathexisの⊕あるいは⊖をみると，関心⊕とcathexis⊖（No.1，2，14）という組み合せがあり，自己の身体に対する評価の低さは逆に身体に対する関心の強さを表現しているとも解釈できるかもしれない。その他関心⊕とcathexis⊕（No.8）や関心⊖とcathexis⊖（No.19）といった組み合せにも注目すべき何かがあるかもしれない。

5．結　　論

以上のような統計的結果に基づく解釈はさらに投影法などによってケース別の質的な裏付けをしなければ明確な結論は出せない。本研究でも，紙面の都合で省略したが，ＴＡＴ，人絵画，ＳＣＴ（Berger Sentence Completion Testの日本語訳），Ｙ－Ｇプロフィールとの関係で，body imageとの間にいくつかの有意なつながりを見い出しているが，その中でも人物画やＳＣＴに顕著な特徴があると考える。ごく一例を挙げると，ＳＣＴの刺激文「もしできることなら」に対して，barrier大，cathexis小，劣等感大という代表的ケースであるNo.2は「もう一度生まれ変わりたい」，No.28は「鳥になりたい」，またbarrier大，cathexis小，活動性小という代表的ケースのNo.19は「もう一度違う世界に生まれてみたい」と反応している。それに対してbarrier小，cathexis大，劣等感小，活動性大のNo.20は，同じ刺激文に対して，「いつも愛情にあふれ，寛大な人間でいたいと思う」と反応している。前者の３名は現在の自分に満足せず逃避的傾向を示しているのに対して，後者はさらなる自己の成長への努力を表現しているといえる。

このような質的な検討を加えていかなければならないことを承知したうえで，結論をまとめると，保護的障壁としての身体的境界からみたボディ・イメージと身体的自己評価，そして劣等感といった三者を結ぶ何らかの関係が存在しているであろうし，さらにこれは活動性とも相互の影響をもっているであろうということになる。

引用文献および参考文献

1．Cormack, P. H.　A study of the relationship between body image and the perception of physical disability. State University of New York, Buffalo, 1966.

2．Cruickshank, W. M.　Psychology of exceptional children and youth, Prentice-Hall, 1963.

3．Fisher, S. & Cleveland, S. E.　Body image and personality, Dover Publications, Inc., New York, 1967 (Second revised edition).

4．片口安史，ロールシャッハ・テスト心理診断法詳説，牧書店，1967.

5．Landau, M. F.　Body image in paraplegia as a variable in adjustment to physical handicap, Columbia University, 1960.

6．Massen, R. L.　An investigation of the relationship between body-image and attitudes expressed toward visibly disabled persons, State University of New York, Buffalo, 1963.

7．宮城音弥，劣等感，朝日新聞社，1970.

8．Sieracki, E. R.　Body-image as a variable in the acceptance of disability and vocational interests of the physically disabled, State University of New York, Buffalo, 1963.